



『それから』

報道写真家 いしかわ ぶんよう 石川 文洋

私は超不器用なので日曜大工はしないし車の運転もできない。ワンプロは打てずパソコンには手を触れたこともない。それでもカメラマンを続けることができたのは、「写真はカメラという機械ではなく心で撮る」と思っているからである。

その心はこれまでに読んだ本から生まれたのではないかと思う。父親は小説家で、毎日机に向かっていたが原稿は全く売れず、超貧乏家庭だった。しかし、本は沢山あったので子どもの頃から活字には馴染んでいた。

中学三年から高校時代にかけて貪るように日本文学と言われていた本を読んだ。一人の作家に集中し読み終わると次の作家に移った。『破戒』、『田舎教師』、『暗夜行路』など主人公が人生に悩む本に魅かれた。『こころ』を読んで夏目漱石に夢中になった。『二十四郎』、『それから』、『門』の三部作が好きだったが、この一冊となれば『それから』（新潮文庫）を選ぶ。特に影響を受けたということはないが三千代という主人公の女性に憧れを抱いた。この時期に読んだ本の内容はほとんど忘れてしまったが、本から受けた感動は心の隅に残っている。

私は人生の喜びは感動の積み重ねと思っている。感動には、美しい風景、旨い料理、良い本、素晴らしい人との出会いなどいろいろとある。そこから受けた感動は目に見えない財産であり、大切なものと確信している。